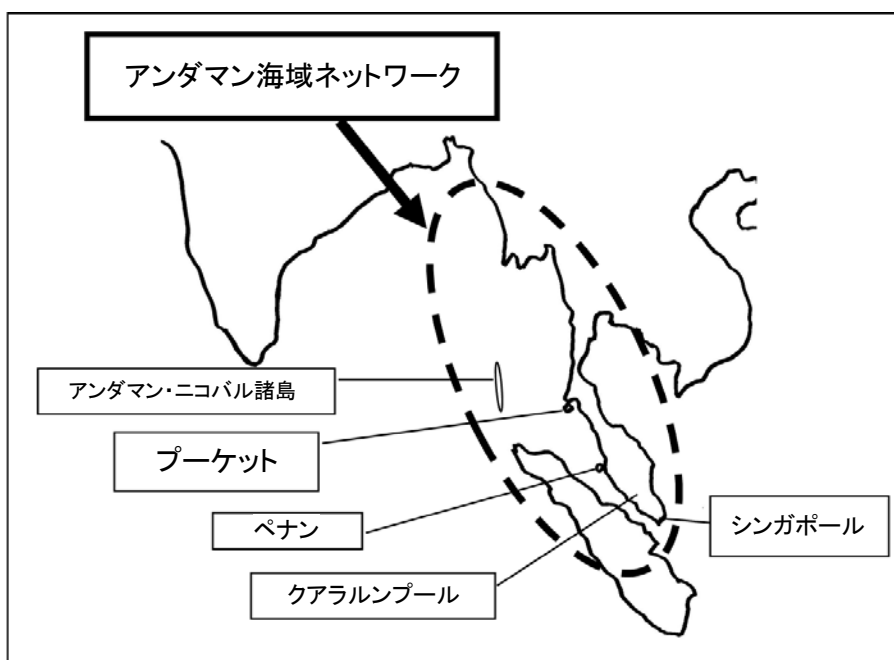


## アンダマン海域ネットワークの形成と展開：錫・ゴム・アブラヤシの社会経済史

宮田敏之（東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授）

### はじめに

本研究の目的は、19 世紀後半から現代に至る、アンダマン海域ネットワークの歴史的形成過程とその展開を検証することにある。本研究に言うアンダマン海域とは、北はミャンマーのアンダマン・ニコバル諸島から、プーケットを経て、ペナンを中心とするマレー半島西岸から、シンガポールにいたる海域である。このアンダマン海域を舞台に、広域のアジア域内貿易、あるいは、環インド洋貿易と接続しつつも、この海域独特のビジネス・ネットワーク、いわば、アンダマン海域ネットワーク（図 1）と称することのできるネットワークが存在していたのではないか？ということを検討しようとするものである。このアンダマン海域では、19 世紀後半以降、プーケット島など、マレー半島西岸地域において錫生産と輸出が発展し、やがて、20 世紀に入るとゴムの生産と輸出、第二次世界大戦後は、アブラヤシの生産、パーム・オイルの加工・輸出が拡大した。これら輸出品の主要な集散地はペナンおよびシンガポールであった。マレー半島西岸地域で生産された錫、ゴム、パーム・オイルは、このアンダマン海域を通じて、時代とともに変化しながら、世界市場にもたらされ、世界商品となった。



（図 1）アンダマン海域ネットワーク （作成・宮田敏之）

本研究は、こうした生産地と世界市場を接続する、生産、加工、流通と輸出の地域的ネットワークのあり方を、アンダマン海域ネットワークと想定した上で検討を加えたい。特に、このアンダマン海ネットワークともいべきネットワークの発展をビジネスの担い手、特に、華僑のビジネスに注目して分析する。具体的には、タイ国プーケットやパンガーを地盤にしなが、アンダマン海域を舞台に、およそ 100 年にわたって、錫から、天然ゴム、アブラヤシ（パームオイル）へと一族のビジネスを発展させてきた福建系タイ華僑のワーニット一族（葉姓）を取り上げる。この一族のビジネスの発展を分析しながら、アンダマン海域ネットワークともいべき、この海域特有のビジネス・ネットワークの存在やその特徴について検証したい。

## 1 日本の ASEAN 戦略とアンダマン海域ネットワーク分析の持つ意味

ASEAN（東南アジア諸国連合）、なかんずく、インドシナ半島に位置する、5 カ国、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムは、アジアの成長センターとして、注目を集めている。特に、アジア開発銀行（ADB：Asian Development Bank）、日本、中国とこの 5 カ国が加わって 1990 年代前半から開始された「大メコン圏」（GMS：Greater Mekong Subregion）の開発プロジェクトによって、インドシナ半島地域は、2000 年代に入り、橋や道路などの交通インフラ整備が急速に進んだ。たとえば、中国雲南省、ミャンマー、ラオス、タイ、マレーシアをつなぐ南北経済回廊の交通インフラ整備が中国の政府開発援助により急速に進められ、インドシナ半島の南北の往来は改善されつつある。他方、ベトナム（ダナン）、ラオス（サワナケート）、タイ（ムクダハン）、ミャンマー（モールミヤイン）をつなぐ東西経済回廊、ベトナム（ホーチミン）、カンボジア（プノンペン）、タイ（バンコク）、ミャンマー（ダウエー）をつなぐ南部経済回廊の整備は、日本の政府開発援助により大きく進展している。また、2012 年に入って、ミャンマーの経済開放が急速に進んでいるため、これら経済回廊は大きな注目を浴びている。貧富の格差の大きいインドシナ地域の調和的な経済発展のために、さらには、日本企業の域内サプライチェーンの高度化のために、こうした道路や橋などの交通インフラ整備に対する日本の支援は極めて大きな意味を持つ。

しかしながら、この東西経済回廊や南部経済回廊の西端の地域、つまりマレー半島西岸地域、言い換えれば、アンダマン海域については、これまで社会経済史研究としては殆ど注目されてきておらず、研究蓄積も不十分であると言わざるを得ない。こうした同地域の社会経済史的研究の空白を埋めるというのが、このアンダマン海域ネットワーク研究の意義である。

もちろん、マレー半島西岸の社会経済史としては、クッシュマン（Cushman 1991）が、プーケットの許（Khaw）一族に焦点をあて、その政治・経済活動を実証的に分析している。しかし、それは、あくまで、華僑史の枠組みである。本研究は、錫、ゴム、パ

ーム・オイルといった世界的な商品の生産、加工、流通と輸出を視野に入れながらも、アンダマン海域を舞台にした社会経済史上の海域ネットワークを想定し、その海域ネットワークのあり方に焦点をあてた。具体的には、タイ国プーケットのワーニット家の100年に及ぶアンダマン海を舞台にしたビジネスのダイナミズムに着目する。それにより、世界商品たる錫、ゴム、パーム・オイルの生産と輸出の拡大が、単に、鉱山やプランテーションなどの原料生産地から世界市場へという枠組みでとらえられるのではなく、生産地と輸出市場をつなぐ、地域特有のビジネス・ネットワーク、本研究でいうアンダマン海域ネットワークの発展を介していたという点に注目する。

東南アジア大陸部からインドにつながる、広大な環インド洋ネットワークが形成されつつある21世紀において、そのネットワークの重要な一部をなすアンダマン海域の歴史的研究は、この地域への関与を一段と深めようとしている日本にとって、極めて重要な意味をもつといえる。

## 2 プーケットを拠点とする福建系華僑ワーニット家（葉姓）

アンダマン海域ネットワークのあり方を具体的に検証するために、アンダマン海域で錫、ゴム、パーム・オイルの生産、加工、流通と輸出ビジネスに従事してきた華僑のビジネスに着目する。本節では、1890年代、福建省から、現在のタイ南部パンガー県に移民した葉発という人物を初代とする葉一族、タイ語ではワーニット家（以下、タイ名で記載）と呼ばれる一族のおよそ100年にわたる歴史を分析する。葉発の息子である、ワーニット家2代目のチアン・ワーニット（葉金剪：1906年 - 1981年：写真1・写真2）が一族のビジネスを大きく発展させた。タイ南部のパンガー県、プーケット県、クラビ県を拠点にして、マレー半島西岸地域の英領マラヤ（マレーシア）、特に、海峡植民地の一つペナンとの連携を深め、錫鉱山経営、錫輸出から、ゴム生産、ゴム輸出、さらにはアブラヤシ・プランテーション経営とパーム・オイルの加工・輸出業を発展させ、事業を多角化してきた。本研究は、時代の変化に対応しながら、ワーニット一族が、どのようにビジネスを拡大させてきたかを、これまで本格的に全く紹介されていない、同一族に関するタイ語・英語資料をもとに解明し、アンダマン海域ネットワークの発展のあり方を検証したい。

### 2-1 チアン・ワーニット（1906年 - 1981年）の時代

ワーニット家（葉姓）は、タイを代表する巨大なビジネス・グループに成長している。農業、農産物加工業、製材業、輸送業、観光業、不動産業等を手掛け、多角化に成功している。ワーニット家は、タイ南部の他のビジネスファミリーと同じように、19世紀後半以降の錫鉱山事業のブームに乗じて、錫鉱山事業を始めた。その後、社会経済の変化に対応しながら、新しい事業にも進出し続けてきた。

ワーニット家のビジネスを大きく発展させたのはチアン・ワーニットである。一族のビジネスの礎を築いた人物である。彼の父、葉発とその妻は、中国の福建省出身の華僑であった。19世紀末、チアンの両親はシンガポール、ペナンを経由して、パンガー県ターイチャー村に拠点を置いた。両親がパンガー県に移り住んだ時、チアンは、わずか3歳であった。しかし、移住からほどなく、彼の父は亡くなってしまった。そのため、チアンは、行商で生計を立てていた母親の手伝いをしながら、子供時代を過ごした。決して裕福な生活ではなかった。成長してからは、様々な職業に就いた。木材の切り出し、魚売り、馬車引きなどを経験した。その間、少しずつではあるが、お金を貯め、やがて、ある程度まとまった資金を元手に船を買い、パンガー県周辺のパンイー島やマーク島で、漁業を営んだという（サーリニー2005a）。

20世紀初頭、マレー半島およびタイ南部では、錫鉱山事業が発展しつつあった。漁業とは別の事業に挑戦しようとしていたチアンに、ちょうど、錫鉱山に関わる仕事が増えつつあった。欧米系会社の錫鉱山向けに、資材を運搬する仕事であった。熱心にその仕事に取り組んでチアンは取引先欧米系企業から大きな信頼を得た。その後、錫鉱石を掘削洗浄し、運搬する独占請負契約を結んだ。やがて、資金を集めて、自ら錫鉱山事業に投資した。さらに、チアンは、商品を運ぶために帆船を新たに購入して、事業を拡大させた。やがて、帆船から動力付き運搬船に買い替えて、パンガー、プーケット、さらにはペナンを結ぶ海運事業にも力を入れ、欧米系企業の代理店にもなった。海運業によってワーニット家の事業基盤はゆるぎないものになった（サーリニー2005a）。

第二次世界大戦がはじまると、タイでは日用品が不足した。しかし、チアン氏は、運搬船を持っていたがゆえに、医薬品も含む、様々な商品をペナンなどマレー半島各地から物資を買い付け、販売することができた。この時期、チアンの名前は次第にタイ国内で有名になった。そのため、人民党政権下のタイ政府は、チアンをパンガー県会社の経営者に任命した。この国営会社は、現在の商業省の県事務所とは全くその責務が異なっていた。第二次世界大戦中の県会社は、国営会社として、住民に必要な物資、たとえば、米や砂糖などを独占的に販売する義務を負っていた。チアンは、県会社の経営者を3年務めたが、辞めた。チアンの一族のビジネスを新たに展開しようとしたからである。チアンは、「チアン・ワーニット社」という名前で、プーケットに拠点を構えて、ビジネスを拡大させた。ゴム加工工場、ココナッツ加工工場、さらに、海外との海運業にも投資した（サーリニー2005a）。

その後、1960年代になると、天然ゴムの価格が低落傾向に陥った。その時期、チアンは、マレーシアで天然ゴムに関する会議に出席した。会議では、天然ゴムは換金作物としては、世界市場に左右される不安定な部分もあることが盛んに議論された。天然ゴムに関する会議ではあったが、参加者にはアブラヤシ栽培の紹介もなされた。マレーシアではすでにこのアブラヤシの試験的栽培が開始されていたためである。チアンは、この会議で議論されたアブラヤシの栽培とパーム・オイルの生産に大きな関心を持ったと

される（サーリニー2005a）。

その後、1967年、チアンは、「タイ・パーム・オイル産業・アブラヤシ農園会社」を設立した。この会社は、タイ最初のパーム・オイル製造会社となった。アブラヤシの栽培に適した雨量や日照時間を綿密に調査した上で、グラビー県アーウルック郡プラーイプラーヤ区に、この会社の農園と工場は設立された。パーム・オイル加工工場とアブラヤシ農園を合わせて、およそ2万ライの広大な敷地で事業を始めた。アブラヤシ農園の広さは、およそ9千ライであった。投資資金額は200万バーツだった。1968年、チアン氏は、本格的に、この地でアブラヤシ栽培事業の準備に取り掛かり、1969年にアブラヤシ栽培を始めた。しかし、土地が痩せていて、アブラヤシの栽培を軌道に乗せるには大変な苦労があったという。アブラヤシの種3万個を、マレーシアから輸入し、クラビー県アーウルック郡のアブラヤシ農園に植え付けた。アブラヤシの植え付けをはじめとする栽培管理は、マレーシアから呼び寄せたマレー人専門家のカセム・オースマンが担当した（クルーン1999：1776）。また、周辺の農家にもアブラヤシの栽培を広めようとした。1972年の終わりには、パーム・オイル加工工場の建設を開始し、1974年に工場が完成した。その時期、周辺の道路が舗装され、物資の輸送が改善されたという（サーリニー2005b）。なお、この「タイ・パーム・オイル産業・アブラヤシ農園会社」のパーム・オイル加工工場の建設にあたっては、タイ投資委員会（BOI:Board of Investment）の投資奨励の認可も受けた（クルーン1999：1778）。

なお、1970年代頃まで、タイ南部では、共産主義勢力が拡大していた。広大な用地を必要とするアブラヤシの栽培を進めるにあたっては経済性の問題だけでなく、こうした思想上および治安上の問題に直面する危険をはらんでいた。チアンが選んだグラビー県アーウルック郡プラーイプラーヤ区は共産主義の活動の盛んな地域ではなかった。むしろ、クラビー県知事やアーウルック郡の郡長達も、アブラヤシ農園の開発に前向きで、用地の選定にあたっては、チアンに協力的であった（クルーン1999：1776）。また、共産主義の問題だけでなく、チアンは、農園周辺の農民たちに、どのようにアブラヤシ栽培を紹介し、普及させていくかという問題も抱えていた。アブラヤシは、農民にとって、栽培経験のない新しい作物であったからである。チアンは、アブラヤシの種を無料で農家に配布した。その際の約束は、そのアブラヤシが育って実をつけ、それをいつ工場に売りに来てもよい。その際、種の価格を相談しようというものであった。チアンは、長い目で投資を考えていた（サーリニー2005b）。そうした経営姿勢は、他の事業家があまりおこなったことのないものであった。その後、農民は、チアンの薦めるアブラヤシの栽培に信頼を寄せた。アブラヤシ農園とパーム・オイル工場をチアンが最初に設立したこのプラーイプラーヤ地域では、チアンは、地元のアブラヤシ栽培農家をはじめ多くの人々に尊敬される存在となった。チアンがプラーイプラーヤという一般には知られていない小さな地域の、しかも不毛だと思われた森を発展に導いてくれた人物だと地元では見なされるようになった。やがて、この地域は1973年に、タンボン（区）からギン

アンプー（準郡）になり、1975年には郡に昇格した（サーリニー2005b）。この昇格は、アブラヤシ農園とパーム・オイル事業がこの地域の社会経済的発展に大きく貢献したことを物語っているといえよう。その後、チアンの農業ビジネスは徐々に拡大した。1970年代には、「ブーケット・ゴム会社」を設立し、5千ライのゴム農園の経営も拡大した（サーリニー2005b）。

## 2-2 エーカポット・ワーニット（1934年 - 1992年）からアピラック・ワーニット（1965年～）の時代

エーカポット・ワーニット（葉合益）は、チアン・ワーニットの長男であった。そのため、チアンが亡くなった1981年以後、一族の事業を継承した。チアンは、生前、息子のエーカポットに人の生きる道を繰り返し話したという。「私たちは、どんなに貧しく、生活の苦しい人であれ、全ての人と付き合いなければならない」とチアンは語って聞かせたという。チアンは、成功をおさめたが、そこに至る人生は大変苦しい道のりだった。そのため、生活の苦しい人たちがチャンスを手にすることができるようにすべきだと考えていた。このチアンの考え方をエーカポットは学び、それを実践するよう心掛けたという。その結果、エーカポットも父親のチアン同様多くの人から尊敬される存在となった（サーリニー2005b）。

エーカポットは、1934年2月20日タイ南部のパンガー県で生まれた。パンガー県の小学校を卒業した。その後、父のチアンは、エーカポットをペナンの中学校と高等学校に進学させた。卒業後、エーカポットは、パンガーに戻り、実家のスズ鉱山事業、天然ゴム事業、アブラヤシ事業、港湾業などに従事した（サーリニー2005c）。

1992年6月5日にパンガー県のワーニット家の墓所で行われたエーカポットの葬儀が執り行われた。その葬儀に際して配布された、いわゆる葬式頒布本には、エーカポットの生前おこなったインタビューが収録されていた。1989年4月10-16日号の『週刊プーチャットガーン』紙に掲載されたものであった（サーリニー2005c）。

「私は7歳か8歳の頃、家を出ました。父がペナンで勉強させました。帆船でパンガー県の港を出発し、6日か7日ペナンまでかかりました。ペナンで勉強して、故郷に戻りました。17歳だったと思います。父が、私をアメリカで勉強させようと考えていることがわかりました。留学準備のため、バンコクのサートン通りのYMCAに通いました。父は、叔父のオーソット・コーシンも一緒にバンコクで学ばせました。私は、遊んでしまいました。ある時、友達に誘われて、ペナンに遊びに行きました。両親にはそのことを知らせませんでした。両親は私を探しても、連絡がつかなくなり、父の怒りをかいました。このような状態で、どうしてアメリカに留学できるのか。目と鼻の先のバンコクでこんなことになって

いると大変厳しくしられました。そこで、アメリカの代わりにインドで勉強しろと父は言いました。私は、インドに行くことはどうしてもいやでしたので、プーケットに戻りました。」

プーケットの実家に戻った後、エーカポットは、父の勧めで、パンガー県、スラターニー県、ナコンシータマラート県、トラン県の父の経営する錫鉱山で仕事をしました。しかし、エーカポットは気前のいい性格で、金遣いが荒く、これ以上、親に養ってもらい続けるわけにはいかないと自ら考え、実家を出て、自分で生きていくと決心しました。この時以来、エーカポットは、父が自分に対して怒っていると思い続けたという。父と息子は、同じように頑固な性格であったため、お互いに言葉を交わすこともなくなった。母のワンニーだけが、その間を取り持ったという（サーリニー2005c）。

しかし、その後、エーカポットは、父の友達の話聞いて、父のチアンが息子を愛していたことを知ったという。チアンは、息子に直接話して聞かせることはなかった。エーカポットの葬式頒布本には、エーカポットのインタビューが次のように掲載されていた（サーリニー2005c）。

「私が若いころ、父の親友がよく事務所で父と話をしにきていました。父は、私の出来が悪いと語っていたそうです。しかし、その父の友人は、私がよく働くので、自分の息子と交換しようと言いました。そして、私は金遣いが荒いが、将来、成功をおさめると信じていると言ってくれたそうです。その後、私が事業を軌道に乗せてからは、父は、いつも友人たちに、私がうまく仕事やっていると語っていたそうです。しかし、一度たりとも、面と向かって褒めてくれるようなことはありませんでした。」

やがて、1950年代になると、エーカポットは結婚し、長女が生まれた。その後、1男7女に恵まれた。チアンにとっては孫である。子供たちが次々に生まれると、チアンとエーカポットの間を子供たちは自然と取り持ってくれ、二人の関係は改善されていった。

エーカポットは自分のパーム・オイル工場や鉱山を浚渫する船を手に入れたと思っていたところ、1981年、折よく、「サヤーム・パーム・オイル社」が5000万バーツから6000万バーツで売りに出された。しかし、エーカポットには、十分な資金現金がなかった。そこで、借入金の保証を父に頼むことを決心した。チアンはあまり多くを語らず、本気であるかどうかを尋ねた。息子が本気で取り組もうとしていることがわかると、ためらわず、手を差し伸べた。そして、すぐさまバンコク銀行に連絡したという。以前、チアンは、バンコク銀行の南部の支店長を務めていたからである（サーリニー2005c）。

その後、エーカポットは、「サヤーム・パーム・オイル社」買収をきめた。しかし、ちょうど、その時期、1981年3月、父のチアンが亡くなってしまった。チアンの葬

儀が終了すると、エーカポットは、生前、父のチアンが連絡をしてくれていたバンコク銀行会長のチン・ソーポンパーニットに面会した。そこで、「サヤーム・パーム・オイル社」買収のための借入金について説明した。チンは、何も問題ないと語り、息子で、社長のチャートリー・ソーポンパーニットを紹介した。チャートリー・バンコク銀行社長は、エーカポットに対して、亡くなったチアンが、嬉しそうに、エーカポットの活躍について語っていたと教えてくれた。エーカポットがチャートリー社長に資金の融通を申し出ると、チャートリーは、いつでも、いくらでも用意すると答えたという。この融資により「サヤーム・パーム・オイル社」の買収を最終的に成し遂げることができた。この時、エーカポットは父の心遣いを深く知ることができたと後に語ったという（サーリニー2005c）。

エーカポット自身が、パーム・オイル事業以外に手掛けた主要なビジネスは、スラータニー県の石膏鉱山であった。そこは、共産主義者の多い「赤い地域」であった。そのため、父のチアンはそこで事業を行うことに強く反対した。母のワンニーも、泣き続けるばかりだったという。その地域での事業を止めるように何度も息子を説得した。しかし、エーカポットは、この石膏鉱山事業を諦めず、結果的に、鉱山事業の経営を成功に導いた。さらに、彼は、事業パートナーのウィチャイ・テープチャルム氏とともに、ナコンシータマラート県チャワーン郡グラトゥーン区ファイマーク村で、エーカポット自身としては、はじめての錫鉱山事業を始めた。その時、設立した会社は、「サップパヤゴーンシンレー・サヤーム会社」であった。さらに、パンガー県ムアン郡トゥンカーンギウ村でも錫鉱山事業を行った。その時設立した会社は、「エーカチャイ錫鉱山会社」であった。またパンガー県ムアン郡パーコー村でも錫鉱山事業を行った。その会社は、「ワーニット・ワッター錫鉱山会社」であった。これらの錫鉱山事業もエーカポットがウィチャイと共同でおこなった。さらに、カーンチャナブリー県トーンパープーム郡にも錫鉱山を開発した。その会社は、「ワーニット・ピローク鉱山会社」と名付けられた。こうして、父のチアンの時代からワーニット家の主要ビジネスの一つであった錫鉱山事業は、エーカポットの世代になっても、着実に拡大し、ワーニット一族の基幹ビジネスの一つとして成長した。また、石膏鉱山開発事業もエーカポットは重視した。スラータニー県ウィアンイサラ郡でエーカポットにとって初めての石膏鉱山開発をはじめたが、その後も、スラータニー県ナーサーオ郡やナコンシータマラート県トゥンヤイ郡にも石膏鉱山を建設した。石膏鉱山事業は、エーカポット率いるワーニット一族の主要なビジネスの一つとなった（サーリニー2005c）。

エーカポットは、パーム・オイル事業も拡大させたが、その成功の秘訣を、かつてチュラーロンコーン大学商業・会計学部で講演したことがある（サーリニー2005d）。

「アブラヤシ農園事業を行う以前のワーニット家のビジネスは、他のタイ南部の他の実業家たちと同じように、天然ゴム事業や錫鉱山事業を行



っていた。しかし、1968年頃、天然ゴムの価格は著しく低下し、7.2バーツになった。錫鉱山事業も低迷していた。父のチアンは、クアラルンプールでのゴムの国際会議に出席した際、アブラヤシが話題に上ったそうです。父は強い関心を持ち、天然ゴムと同様、やがてタイの主要な商品になると確信しました。」

チアンは、1967年クラビー県でアブラヤシ農園に投資し、パーム・オイル加工工場を建設したが、そのパーム・オイルの主な販売先は、国内であり、特に、バンコクのタイ・リーバー・ブラザーズ社であった。こうしたつながりがあり、タイ・リーバー・ブラザーズ社の親会社で、世界的な企業であるリーバー・ブラザーズ社（英蘭系企業）が、チアンに対して、直接、合弁事業を提案してきた。しかし、1981年チアンが亡くなってしまい、交渉は一時中断した（サーリニー2005d）。

エーカポットが父の事業を引き継いだ後、リーバー・ブラザーズ社は、あらためて合弁事業を提案してきた。この時期、ワーニット家に提携を申し出てきた企業はリーバー・ブラザーズ社だけではなく、イギリスやマレーシアの多くの企業が合弁事業をもちかけてきた。エーカポットが率いることになったワーニット家は、最終的に、リーバー・ブラザーズ社と合弁事業を行うことを決定した。この合弁事業は、その後、ワーニット家のパーム・オイル・ビジネスをさらに大きく発展させた。エーカポットはリーバー・ブラザーズ社と提携した理由を次のように語ったことがある。リーバー・ブラザーズ社は、アブラヤシ農園やパーム・オイル工場を世界で最もたくさん所有している。南米のコロンビア、アフリカのケニア、ナイジェリアなどである。また、この業界では最も有名な企業である。ただ、最も重要な点は、最新の技術を有しているということである。これは、ワーニット家はもちろんのこと、タイ国の発展にも大変有益であると考えた（サーリニー2005d）。

ワーニット家とリーバー・ブラザーズ社は、1983年「ユニワーニット・パーム・オイル社」を設立した。ワーニット家側の合弁企業設立の目的は、パーム・オイル・ビジネスの費用を低下させ、効率性を高め、さらに、リーバー・ブラザーズ社の最新技術を導入するというものであった（サーリニー2005d）。

たとえば、「ユニワーニット・パーム・オイル社」は、リーバー・ブラザーズ社がアフリカから導入した「ゾウムシ（Weevil）」を活用した。この「ゾウムシ」の活用により、アブラヤシ農園の労働者の手間は大幅に削減された。というのも、農園労働者が受粉しているかどうか確かめるのは大変な困難が伴っていたからである。もし、アブラヤシの受粉が不完全であれば、アブラヤシの果実が不十分になるという弊害があった。「ゾウムシ」の導入により、受粉が円滑に行えるようになり、アブラヤシ農園の労働負担を軽減し、会社の支出も大きく削減できたという（サーリニー2005d）。

また、リーバー・ブラザーズ社との提携を通じて、アブラヤシの品種の研究にも力を

入れた。アブラヤシは年を重ね成長すると、幹が高くなる。それでは、アブラヤシの実の収穫に手間がかかる。そのため、幹の背の低い新しい品種を導入した。これにより、収穫作業の効率性が大きく改善された。また、エーカポットは、アブラヤシ農園とパーム・オイル加工工場との連携にも力を入れた。たとえば、エネルギー費用を低減させるために、アブラヤシの殻を燃やして、パーム・オイル加工工場のエネルギーとした。これにより、燃料費を年間 200 万バーツ以上も節約できるようになったという（サーリニー 2005d）。

エーカポットは、パーム・オイル事業、錫鉱山や石膏鉱山事業のほかに、様々な事業を手掛けた。1978 年には、タイ東部のチョンブリー県に「エーカチョン病院」を設立した。この病院はチョンブリー県では初めての私立病院として設立された。この病院事業は発展をつづけ、1993 年にはタイ証券取引所に上場された（The Brooker Group 2003:728）。また、エーカポットは、不動産開発にも力を入れた。プーケットには、エーカポットが社長を務めた「ワーニット・リニアル社」が 19 階建ての「ワーニット・プラザ」という商業ビルを建設した。また、エーカポットが所有した「ワーニット・ベイ・フロント社」は、プーケット島南部に「ワーニット・ベイ・フロント・ビル」という高級住宅プロジェクトをおこなった（The Brooker Group 2003:728）。

エーカポットは、父のチアンが存命中は、父から独立し、自ら事業を開拓していこうとする志向が強く、父の会社とは別の錫鉱山会社を作り、父の手がけなかった石膏鉱山の開発もおこなった。さらに、パーム・オイル事業も大きく飛躍させた。「サヤーム・パーム・オイル社」をバンコク銀行の融資を活用して買収し、事業を積極的に拡大した。また、父チアンの死後、チアン存命中から交渉中であつたリーバー・ブラザーズ社との提携をまとめ、「ユニワーニット・パーム・オイル社」という合弁企業を設立し、チアン・グループをタイ有数のパーム・オイル事業グループへと発展させた。また、病院事業、不動産開発事業も手掛けて、ワーニット家のビジネスの多角化を、チアン時代にもまして、積極的に進めた。

1992 年のエーカポットの死後、息子のアピラック・ワーニット（1965 年～）がワーニット一族の事業を継承した。しかし、エーカポットが亡くなった 1992 年、アピラックは、まだ 27 歳であつた。そのため、長女のポッチャナー・マーノートをはじめ 6 人の姉と 1 人の妹が、アピラックとともに、父エーカポットの残した事業の発展に共同で取り組むこととなった。2015 年時点で、アピラックは、ワーニット一族の基幹企業である「チアン・ワーニット社」の社長を務めるとともに、アブラヤシ農園とパーム・オイル事業の「タイ・パーム・オイル産業・アブラヤシ農園会社」の社長、リーバー・ブラザーズ社との合弁企業である「ユニワーニット社」の社長、さらには、「エーカチョン病院」の社長などに就任している。アピラックがワーニット家の主要企業の社長に就任し、ワーニット家のビジネスを統括するという組織が完成している。特に、「ユニワーニット・パーム・オイル社」の発展は目覚ましく、2003 年にはタイ証券取引所に上

場を果たした。また、2014年にはフィリピンにもパーム・オイル工場を建設し、パーム・オイル生産の強化に乗り出している。ただし、エーカポットの長女ポッチャナーは、「チアン・ワーニット社」、「ユニワーニット・パーム・オイル社」の経営役員、さらには「エーカチョン病院」の副社長、不動産の「ワーニット・リニアル社」や「ワーニット・ピロック鉱山会社」の社長を務めるなど、アピラックの側近としてワーニット家のビジネスを支えている。また、次女のカーンチャナー・チットルディームパイも長女のポッチャナー同様、「チアン・ワーニット社」、「ユニワーニット・パーム・オイル社」、さらに「エーカチョン病院」の経営役員としてワーニット家のビジネスの拡大の一翼を担っている。なお、五女のアンチャリー・ワーニット・テーパブットは、民主党プーケット選挙区選出の民主党下院議員およびプーケット県自治体長を務めた。アンチャリーのプーケットを地盤にした政治活動の成功は、ワーニット一族のビジネスがタイ南部の地域社会を基盤とし、その政治経済社会システムと深く結びついていることを示唆している。

## おわりに

ワーニット家は、マレー半島西岸地域、アンダマン海域をビジネスの主な舞台として発展してきた。しかし、ペナンやシンガポールなどに会社や支店を設けるというわけではなかった。あくまでマレー半島西岸のタイ南部各地を拠点としていた。錫、天然ゴム、パーム・オイルの生産は、タイ国南部のプーケット県、パンガー県やクラビー県などで行ってきた。いわば、タイ南部のローカルな企業であったともいえる。しかし、世界市場の需要に対応しながら、錫鉱山経営、天然ゴムプランテーション経営、アブラヤシ農園経営、パーム・オイル加工業、石膏鉱山業へと多角化しつつ、単なる原料の生産だけではなく、その加工・流通を垂直的に統合し、いわば、世界市場向け工業用中間生産物の製造企業グループとして成長してきた。さらに、1980年代には、世界的なパーム・オイル製造企業であるリーバー・ブラザーズ社からの提携の申し出を受けて、「ユニワーニット・パーム・オイル社」という合弁企業を設立した。その合弁企業は、2015年時点では、世界最先端のパーム・オイル加工技術を持つ企業へと発展している。海外の資本や最新技術の導入によって、原料の生産・加工・流通という垂直的統合を高度化させつつ、あくまで、工業用中間生産物製造の企業としての伝統を受け継いでいる。

他方、ワーニット家のこうしたビジネスは、世界市場への入り口である中継地としてのペナンやシンガポールと強力な貿易関係を構築しつつ、発展してきた。もちろん、首都バンコクとのつながりを強めつつも、錫、天然ゴム、パーム・オイル、さらには石膏などへと、投資対象を変化させつつ、多角化しえたのは、ペナンやシンガポールを通じて、世界市場の需要の変化に対応してきたからである。ワーニット家のビジネスは、世

界市場に直接的につながるといよりも、ペナンやシンガポールなどの中継地につながる海域、言い換れば、アンダマン海域という場を通じて、世界市場とつながってきたのである。

しかも、ペナンやシンガポールとのつながりは、単なるモノの輸出・輸入だけでなく、モノに付随する情報のネットワーク、あるいは貿易を通じた人的ネットワークをも築いてきた。たとえば、チアンは、天然ゴムの市況情報を手に入れるためにペナンやマレーシア・クアラルンプールにもしばしば足を運んでいたが、1960年代後半にはアブラヤシやパーム・オイルの情報を入手し、結果的に、タイで初のパーム・オイル工場の建設を実現させた。ワーニット家は技術情報や市況情報のネットワークを、アンダマン海域を通じて、築き上げていた。また、チアンは、1940年代に、小学校を卒業したばかりの跡取り息子のエーカポットをペナンに送り出し、高校卒業までペナンで学ばせた。チアンにとって、そしてワーニット家にとって、ペナンは、後継ぎとなる一人息子を送り出すことのできる、心理的に、身近な場であり、息子の将来の可能性を広げるために重要な場であった。さらに、チアンは1960年代にクラビー県にアブラヤシ農園を設けた際、その専門家としてマレーシア人専門家を招聘した。このように、ペナンやシンガポールからタイ南部のマレー半島西岸地域を含むアンダマン海域は、ワーニット家にとっては、一族のビジネスの成否や一族の将来を左右する貴重な情報をもたらす場であった。と同時に、ビジネスを通じた人的ネットワークを構築する場でもあった。

もちろん、ワーニット一族のビジネスだけを取り上げて、アンダマン海域ネットワークのあり様を語りつくすことはできない。しかし、ワーニット一族のビジネスからは、アンダマン海域の中で展開したビジネスの地域的に強固な紐帯をもつネットワークの一端を窺い知ることができる。むしろ、今後は、アンダマン海域を一つの場として設定しつつ、政治、社会、文化的な視点を取り入れつつ、ワーニット一族のケースのようなビジネスのあり様を、具体的に、歴史的かつ実証的に分析し、情報を共有していくことが必要であろう。アンダマン海域ネットワークという言葉だけを独り歩きさせるのではなく、アンダマン海を開かれた研究プラットフォームの場とし、具体的な実証研究を共有し、比較検討する場としていくことが重要である。開かれた場としてアンダマン海域ネットワークを設定することは、アンダマン海の持つ、美しく、開放的な自然景観にふさわしいと思われる。

【付記】本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団 2012 年度「アジア歴史研究助成」の支援を受けておこなわれたものです。財団のご支援に対し、心から感謝申し上げます。

<参考資料>

写真1 チアン・ワーニット  
[出所] (サーリニー2005a)



写真2 国王ラーマ9世の母君から記念品を受け取るチアン・ワーニット：1970年代  
[出所] (クルーン 1999 : 1776)



写真3 チアン・ワーニット (左)、エーカポット・ワーニット (中央) とその家族  
[出所] (サーリニー2005c)



写真4 エーカポット・ワーニット夫妻と従業員 [出所] (サーリニー2005d)



写真5 エーカポット・ワーニットと家族 [出所] (サーリニー2005e)



写真6 タイ国クラビー県の「タイ・パーム・オイル産業・アブラヤシ農園会社」敷地内にあるチアン・ワーニットの銅像 [出所] (クルーン 1999 : 1777)



写真7 タイ国最初のパーム・オイル加工工場となった、クラビー県の「タイ・パーム・オイル産業・アブラヤシ農園会社」  
[出所] (クルーン 1999 : 1777)





写真8 ユニワーニット・パーム・オイル社のアブラヤシ農園（クラビー県）

〔出所〕（Univanich Palm Oil Public Company Ltd.2015）



写真9 アピラック・ワーニット

〔出所〕（Univanich Palm Oil Public Company Ltd.2015）





## 【参考文献】

(タイ語)

ครีน มณีโชติ, "เจียร วานิช," *สารานุกรมวัฒนธรรมไทยภาคใต้ เล่ม ๔, มุขนิธิสารานุกรมวัฒนธรรมไทยธนาคารไทยพาณิชย์*, 1999, หน้า 1775-1780.

(クルーン・マニーチョート「チアン・ワーニット」『タイ文化事典・南部編』第4巻、1999年、1775 - 1780 ページ)

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(1)," *BizWeek*, 2005a.

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(2)," *BizWeek*, 2005b.

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(3)," *BizWeek*, 2005c.

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(4)," *BizWeek*, 2005d.

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(5)," *BizWeek*, 2005e.

สาลินี ปลาบ, "วานิช นักสู้แห่งอันดามัน, เรื่องเล่าตระกูลดัง(6)," *BizWeek*, 2005f.

(サーリニー・プラーブ「著名家族の歴史・ワーニット家：アンダマン海の挑戦者（1）～（6）」『ビス・ウィーク』2005年 a,b,c,d,e,f)

(英語)

Cushman, Jeniffer W.(C.J.Reynolds ed.), *Family and State: The Formation of A Sino-Thai Tin Mining Dynasty 1797-1932*, Oxford University Press, 1991

The Brooker Group, "The Vanich Family (Vanich Group)," *Thai Business Group: A Unique Guide to Who Owns What (5<sup>th</sup> Edition)*, The Brooker Group, 2003, pp.728-733.

Univanich Palm Oil Public Company Ltd., *Univanich Annual Report 2014*, Univanich Palm Oil Public Company Ltd., 2015.